

My Dream Job My Dream Job

ノーマン・エリクソン・パサリブ

西野恵子 訳

高速道路の出口から 10 キロほど行った川のほとりに位置する、グリーンフェンスに囲まれた家で、My Dream Job は、わたしと一緒に成長した。両親はいつも働いていたから、わたしたち、血の繋がっていない双子が、家を駆け回り、荒らしても、構わなかった。朝、^{Can Xué}残雪を読んで、一日中昨晚のコーヒーを飲み、ベッドに入る前にはシースルーの魚に話しかける方法を自分たちで学んだ。^{Can Xué}残雪。溶けるのを拒む、茶色い雪。わたしたちも、かなり汚れていた。肉と泥のキメラが二体。My Dream Job は、暑い午後と戯れ、蚊の赤ちゃんと一緒に泳ぐのが好きだった。My Dream Job は、カニ語でくだらないことを話した。My Dream Job は、スクールバスの停留所まで、わたしと一緒に歩いた。My Dream Job は、車内で席を譲ってくれた。学校ではシスターたちに囲まれ、わたしと一緒に世界について学んだ。図書室で、「川」のギリシャ語と、ドイツ語と、バタック・トバ語を調べた。わたしたちは 3 つを掛け合わせ、言語のポリアモリーを編み出した。三位一体となった液体は、川を豊かにし、新世代の水を生み出した。少しの間、わたしたちは、川を誰にでも無料で分けてあげられた。わたしたちの川は覚えているから、近隣の見ず知らずの人たちは、川を深く敬った。夜のアヴェ・マリアの後、My Dream Job は暗闇でわたしにささやいた。わたしたちはお互いに向けて手を伸ばした。手をつなげたときにはいつも、手が祈りに包まれていた。わたしは、祈りを舐めとった。胃に「恵みが満ちて」いった。いつか、成長したわたしは、My Dream Job をセーターみたいに着るはずだった。My Dream Job は、変わらないはずだった。わたしは、高層ビルでお金と遊んでいるはずだった。両親を、職場から買い戻せるはずだった。シスターは言った。世界とはそういうものです。お金とは水のようなもので、だからそれをリキッドと呼ぶのです。いずれあなたは My Dream Job に成長し、高層ビルの周りを歩いて、お金と遊ぶでしょう。いずれみんな、My Dream Job のことは忘れてしまうでしょう、と。わたしは言った。川は違う、川は覚えている、と。

My Dream Job (Tilted Axis Press, 2024) 所収

Copyright © Norman Erikson Pasaribu

Translation copyright © Keiko Nishino